

生涯現役

木村 迪夫

今年の冬は、二十数年ぶりという豪雪に見舞われた。果樹の枝折れ・倒木は県域全体に未曾有の大被害をもたらした。

春先には、一転して連日高温の日々となった。稲作、果樹、野菜ともどもに成育は順調というもの、水不足でサクランボの果実は玉張りが悪く、小粒、小玉の結果に終始するのではあるまいか。例年ならば、6月の中旬から下旬にかけてが主力品種の佐藤錦のシーズンなのだが、今の時期（6月の初旬）にすでに、収穫期を迎えようとしている。

着果については、開花時期の4月下旬にかけては、好天つづきで、マメコバチの飛翔も良く、着果は昨年を大幅に上回ったようである。しかし果実そのものの出来が悪く、小粒小玉ではどう仕様もない。朝仕事、雨よけテントの被覆作業をしていた隣の園地のシズオさん、「あまりの小粒で、親戚に呉れてもやれないような、出来だなやえ」と、愚痴る。出荷販売実績としては、不作の昨年と変わらないのではあるまいか。

わが家の果樹栽培の主力品目の一つでもあるプラムは、何故か今年も昨年同様に着果が悪い。プラムのはしりの品種である大石早生などは、摘果もほどほど、ソルダムなどは、摘果の必要も無いほどである。農協の果樹組合のプラム部長を勤める当方にとっては、これでは張り合う力が湧いてこないというもの。

デラウエアは、今年も自給ほどの面積を栽培することにして、あとは休むことにした。胃の手術をして、ようやく2年目を迎えることができた。「3年は無理してはダメだぞ」という。家族、友人、親戚の忠告に従ってのことだ。妻は「デラウエアは、伐るべはあ」と、促す。「お父さんの体に無理かかるばかりだから」とも。

しかし、25年前、養蚕から果樹栽培に切り換え、名実ともに胸の張ることのできる自立農家を夢見て、新植に精を出したことを思い起こせば、痛恨のきわみである。病後の経過に期待しながら、いま一度、全面積の栽培

に戻りたいものと密かに思うこと、しきり。

それにしても、50年前、地元の農業高校を卒業し就農したころ、田圃は少なくとも1ヘクタール（1町歩）、畑地、園地も1ヘクタール以上の経営面積を有する農家をめざしたものだ。その頃のわが家の経営面積は、田圃が80アール、畑が50アールほどしかなかった。以来50年かかって少しずつ買いつけてきた。出稼ぎや、兼業などしなくとも、農業だけで生活の成り立つ農家を夢見てのことだった。

経営面積としては、田圃も、畑地、園地も、ともどもに目標を超えた。しかし世の中の状況は、大きく変化してしまった。1ヘクタールや2ヘクタールの田圃を持ったとて、どうにもならない世の中に変貌してしまった。加えて減反政策である。稲作の出来ない田圃など、想像もしたことは無かった。「晴耕雨読」の夢など、さらに遠退いてしまった。

現在私は、65歳、妻は63歳。農業後継者は居ない。まさにわが家も高齢者農業に加えられる年齢となってしまった。しかし先のことを考えない訳ではないが、「生涯現役」を自負し、さらなる先の夢を生きるのみである。

（山形県上市市・農業）

農業への新規参入

石川 玲

現在私は岩手県北上市で農業の勉強をしています。来年の4月には独立し、いよいよ農業で生計を立てる、という生活を営んでいく予定で準備を進めているところです。今から2年ほど前、それまで畑の土いじりさえほとんど経験のなかった私がこの地に来て、様々な体験をさせてもらいました。土作りや作物の作り方という基本的なものから、流通の仕組み、経営方法、そして地元や県内の方々との交流まで。1ターンによる新規就農は厳しいと繰り返し言われますが、同時に農家の方々を始め多くの方々の励ましと農協の多大